

『御湯殿上日記』にあらわれた浄土宗

玉山成元

一

室町時代に入り、浄土思想は一般化し、とくに浄土宗は隆盛期を迎えた。この影響は宮中にも反映し、百万遍念仏をはじめ、浄土教に関する多くの行事が行われていった。これらの事実は、早くも多くの学者によつて注目され、ことに辻善之助博士をはじめとする卓論によつて究明された。その後さらに研究は続けられ、いくつかの新事実が解明され、史実のみならず出尽した感がある。それなのにあえて私がこれから論じようとする目的は、従来の研究があまりにも個々の史実にのみとらわれ、浄土宗あるいは浄土教という大きな流れの上に立つ意義づけが行われていないためである。『御湯殿上日記』を丁寧に読みなおし、浄土教のどんな流れが宮中に入つていったのか、さらに時代によつてどう変つていったのか、その原因がどんなところにあるのか、ということをおおむねの上から推察してみたいと思う。もちろんこの問題を解決す

『御湯殿上日記』にあらわれた浄土宗（玉山）

二

るのには『御湯殿上日記』のみでは片手落であり、他に多くの史料をふまえないといけないことはいうまでもない。しかし今回はその試論として『御湯殿上日記』によつた。

『御湯殿上日記』の記載は文明九年（一四七七）からである。これ以前の後花園天皇時代に関係をもつていた浄土宗寺院は清浄華院と百万遍知恩寺である。当時の清浄華院は万里小路家が檀越であり、住持にも定玄、等鸞など一族のものでなつていた。寛正三年（一四六二）には称光天皇の善知識となつたということで等鸞に「仏立恵照国師」の国師号が追贈された。これは念仏に関心をもつ一条兼良の助力によつたものであるが、この一門の住持は貴族の出ということで宮中や公家衆との交渉が密接となり、宮中における実力をもつようになつた。知恩寺の方は良敏の代、寛正三年に勅願所になつたが、次の聖然も綸旨をもらつている（『知恩寺文書』）。彼は日

野豊光の子供というばかりでなく、後花園天皇崩御のとき善知識となり、遺体を移すのに尽力している。これはその役であつた泉涌寺の僧が大乱で不在であつたためであつたが、こうした事実が以前より宮中との接近を深めていつたことはいうまでもない。けれども浄土宗の宮中と接近した最大の理由は、中世を通して流行した、生前には天台・真言の祈禱、死後は極楽往生という風習を忘れてはならない。後土御門天皇の時代になるとその様相は一段と頻繁になる。大乱後宮中の勢力は失墜し、天皇は未来に望みを托そうとされたと先人が指摘しているが、浄土宗が宮中に接近するには絶好の機会であつた。事実後土御門天皇の浄土宗に対する帰依は格別で、

前代よりさらに一段と発展していつたが、宮中に召された僧侶は、二尊院善空や仏陀寺邦諫という西山派の僧と天台僧真盛で、ことに真盛に対する帰依は著しかった。短期間にこれほど召された人はいない。彼らは法談や『念仏草子』『阿弥陀経』『法華経』『往生礼讃』『三心釈』『観念法門』『往生要集』の講説をしたり、經典の書写ならびに朱点、十六観の和歌を詠じ、往生講もやれば善知識となつたり、十念授与や円頓戒の授与など、さまざまな行事を行つてゐる。こうした他宗僧侶の活躍の中で清浄華院玄周は、長享二年（一四八八）五月二十七日に向阿筆の阿弥陀像を持参して嘉樂門院の追善供養をし、翌六月には『阿弥陀経』の講釈をしている。その後、明応三

年九月十三日には下河原殿に十念を授与し、追善和歌に出席をしているが、明応八年からは塔頭の華開院靈宝が出入し、『三部仮名抄』を講説し、同九年九月には後土御門天皇の臨終に十念を授与している。

さらにこの時代の特徴は、今までこれという実績のなかつた知恩院が進出してきたことである。知恩院の記事の初出は文明十七年十二月、法然の画像を持参したことである。ちょうど真盛が宮中で『往生要集』を講じているときである。知恩院は大乱で一時伊香立に難をさけ、文明十四年、住持珠琳の働きによつて堂宇を再興し、大きく発展しようという意気に燃えていたときである。青蓮院の保護下にあつたとはいへ、宮中への接近を計つたに相違ない。この後明応二年七月十三日には典侍庭田朝子の一周忌、翌年には三周忌の法要に誦経を伏見の般舟三昧院で行つてゐる。同四年四月には法然筆の六字名号を持参し、六月には乳人某の中陰供養を行つてゐる。

三

明応九年から大永六年（一五二六）の二六年間、つまり後柏原天皇の時代は欠載になつてゐるので、他の史料で略述すると、この時代、前代まで大きな力を持つていたと思われる西山派の諸寺院の活躍はずつとにぶり、わずかにその力を留め

ているにすぎない。それによつて鎮西流白旗流の抬頭はめざましい。いやあまりにも白旗派の抬頭が目立つために、西山派はその陰に隠れてしまつたのかもしれない。その中で最も活躍の目立つのは知恩院と知恩寺である。

永正元年（一五〇四）八月、愚底は珠琳の代りに三河から知恩院に入山、同八年愚底が辞山すると、後住として訓公が三河から入山する。ところが同十七年十一月、訓公は三河信光明寺の住持であつた存牛を後継者と定めて入寂、宮中でも住持の綸旨を出したが、存牛は辞退して入山しなかつた。そこで京都の有力寺院であつた浄教寺開譽など六か寺が連署して存牛の説得をした。この結果やつと入山する運びとなつた。そして後柏原天皇の帰依をえ次第にその力を拡大していつた。一方早くから宮中と関係をもつ知恩寺は、寛正四年には幕府の祈願所となり、文明五年聖然のとき、浄土宗第一の寺として先例を無視した紫衣の綸旨をもらつた。大永元年（二五二）後柏原天皇の勅請によつて慶秀が八幡正法寺から入山し、翌二年四月には後柏原天皇が一枚起請文を写して慶秀に与えている。さらにこの年九月には、宮中で七日間「大原談義」を講進させている。この講進のすばらしかつたことは三条西実隆が絶賛していることでもわかる（『知恩寺文書』）。このように知恩寺も知恩院と同様、後柏原天皇の帰依をえて基盤を確立し発展していつた。

『御湯殿上日記』にあらわれた浄土宗（玉山）

大永三年、興隆発展を続ける両者の間に、浄土宗総本山の資格をめぐる争論が生じた。このとき知恩院に味方した青蓮院尊鎮は、何か都合の悪いことがあつて高野山に逐電してしまつた。これは一種の示威運動であつたろうが、これが効を奏し、知恩院側に総本山の資格が承認されることになつた。しかし、ここで問題になるのは、なぜ両寺が総本山の資格を争つたかということである。それは当時まだ浄土宗においては、確固とした本末関係を決定づける組織ができていなかったからである。特に京都においては、この二寺のほか金戒光明寺、清浄華院などが独立して発展し、いわば群雄割拠の状態ではなかつたろうか。その中でこの知恩院・知恩寺の二寺はすばぬけて活躍していつた。知恩寺は旧来の勢力をもち、知恩院は再興に燃える関東の新興勢力である。これは当然対抗意識を燃やすに相違ない。いつてみれば必然的な歴史的抗争である。いずれにしても、この争論の結果、知恩院は総本山としてその基礎を確立し、以後の浄土宗発展に大きな役割を果すことになる。

それはともかく、知恩院、知恩寺の隆盛は、そのまま当時における浄土宗の発展であつたといつても過言でない。そして宮中においても、その力は前代の西山派や一条派の力に代りうるものを十分もつていたといつてよい。すなわち西山派や一条派によつて代表されていた浄土宗は、皇室および公家

衆の経済的な没落によつてその力を失つていつた。ところが関東に根強い基盤をもち、三河を中継地点として京都に入つてきた鎮西流の白旗派は、ますます発展の一途をたどり、浄土宗といえは白旗派が代表されるようになっていつた。そんなわけで、この時期はちょうど新旧交代の一過渡期であつたといつてよい。

四

後奈良天皇も浄土への関心は深かつた。前の時代に度々散見した二尊院や元応寺の記事も見えるが、知恩院や知恩寺と比較すればはるかに交渉は少なくなつてゐる。

知恩寺慶秀は後奈良天皇にも出仕し、享祿二年（一五二九）

四月には小御所で三日間『阿弥陀經』を講じ、中日には三条西実隆や公卿たちと盃を重ねて談笑し、天皇も殊勝な法談を讃えている。天文七年（一五三六）八月にも宮中に慶秀を呼び、浄土法文の不審点を質問する積極さがみられる。慶秀の後は賀譽となるが、この人は短期間で終り、天文十二年には勅請によつて炭翁が住持となり（『知恩寺文書』）、十一月には召されて浄土法文の講義をしている。翌年九月二十七日には後花園天皇と後土御門天皇の追善供養の一部として晦日まで『選択集』の講義をさせ、同十七年には曼荼羅を、同二十年八月六日からは五日間にわたる法談が行われた。同二十二年六

月十九日には勅請によつて炭長が入山している。炭長の後任炭興も勅請であつた。このように知恩寺の住持は勅請が好例になつていつたが、行事に関する記事はなく、知恩寺の記載は専ら末寺や関係寺院の香衣執奏で終つてゐる。

これに對して知恩院は、大永六年（一五二六）後柏原天皇の崩御のとき、存牛はその善知識として参内し、翌年には法然の伝記『四十八巻伝』を観覽に供したことをはじめ、度々宮中に参内して法談を行つたり、阿弥陀画像を持参して頂礼させたりしている。そして天文八年に青蓮院尊鎮の仲介により、法然に光照大師の追贈が下賜されようとしたが、山門の訴えによつて実現しなかつたという（『嚴助往年記』）。けれどもこの前に勅額が下賜され、八月二十三日存牛は謝礼に参内している。また同十七年知恩院では本尊を宮中に運び供養しているが、この後行事に関する記載はなく、知恩寺と同様、末寺や関係寺院の香衣・勅額などの執奏に終つてゐる。しかし、その件数は前代より相当多くなつてゐる。この辺にも總本山としての地盤を確立し、その法流を基礎にして、次第に浄土宗第一の寺院としてその力を伸張しはじめたことがわかる。このように活発な兩寺の陰にかくれ他の寺院の動きは稀にしか見られない。

正親町天皇の時代は他の寺院を抑えて、知恩院がその力を遺憾なく發揮し、完全に宮中に浸透してゆく時期である。知

恩院の隆盛とともに浄土宗がその隆盛期を迎える時代であるともいえる。永禄六年（一五六三）四月七日、後柏原天皇聖忌の仏事に聡輔は小御所に召され、一枚起請文を読んでいる。

同十二年八月には種々の寺宝を持参して見参させ、『大経』十八願の文を講じている。この後天正二年（一五七四）十一月五日には乳人某の祥月法要を知恩院で行っている。またあるとき、末寺の香衣の件で参内した聡輔を長橋局に呼んで十念を受けている。このように、この時代になると、機会あるごとに知恩院聡輔は参内し、何かしら談じてくるという状態であつた。こうした知恩院の動きに対して知恩寺岷州は、わずかに天正七年九月五日、後奈良天皇聖忌の仏事に参内し、『阿弥陀経』を講説しているだけである。この他には目立つた動きが何もなく、まったく知恩院の一人舞台である。しかし前の三天皇にくらべると宮中に出仕する記事はあまりにも少ない。そこにはいろいろな事情があるうけれども、知恩院の力が他を完全におさえ、浄土宗白旗派の正統を確立してゆく過程がうかがえる。

五

室町時代の浄土宗は、虎閥師練が附庸宗というように、教義的にはある程度統一されていても、教団としてまとまっていなかった。だから勢力ある寺院が不完全な本末圖を形成

している時期であつた。こうした状態にあるとき、浄土宗の僧侶が宮中との関係をもてたのは、その出身が大きな影響をもち、公家との交渉が大きく左右していった。だからかなりの名僧でも簡単に宮中への出入りは不可能であつた。しかし時代とともに経済的な面から公家は没落し、政治的にも勢力を失つていった。そのころ浄土宗では新らしく入洛した白旗派が基盤をきづき、大きく物をいう新旧交代の時代となつていった。そのため西山派や一条派をはじめ、公家と関係をもつていた寺院は運命をともにし、活動的な白旗派オンリーの時代となつていった。その中でも知恩寺までが宮中との関係を薄くし、知恩院のみが総本山格で交渉をもつようになっていった。こうしてみると宮中における浄土宗僧侶の関係は、宗門全体の流れの上で、常にそのピークに立つ隆盛な派によつて占められていたことに注意をしなければならない。従来宮中と交渉をもつた僧侶は、すべて当代一流の名僧であつた。しかし名僧であれば必ずしも宮中と関係をもつことができたとは限らない。関係のもてない名僧は沢山いる。こうした点から考えてゆくと、そこには政治力、とくに宗政の力というものが、時代とともに大きく左右していったことを忘れてはならない。